様式第２号

平成２７年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２８年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>講師</td><td>氏 名</td><td>南津　佳広</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">教養英語科目における翻訳手法の導入とメタ言語能力の開発</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>南津佳広</td><td colspan="2">保健福祉学部　保健福祉学科　講師</td><td colspan="2">通訳翻訳学・英語学（認知語用論）</td><td colspan="2">アンケート・学習ポートフォリオの分析とインタビュー調査</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>松田雅子</td><td colspan="2">情報工学部
情報工学科　教授</td><td colspan="2">英語教育・英文学・カナダ文学</td><td colspan="2">アンケート・学習ポートフォリオの分析</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">現在、日本における高等教育機関である大学の教養科目としての英語教育の最終目標をどこに置くべきかについて様々な観点から議論が行われている。本研究では、大学の英語教育の最終目標の位置づけを染谷（2010）に倣い、英語という外国語の学習を通して母語を含めた「ことばへの意識」とその背景にある「異文化への意識」を高めつつ、「自己実現能力」の養成と位置づけることとした。
「グローバル化」の流れの元、学部レベルの教養科目としての英語教育でも、目的言語である英語で教える、会話・音声中心のコミュニカティブ・アプローチ（CA）を導入する大学が飛躍的に増えている。ところが、CAの教育効果はまだまだ改善の余地がある。まず、CAを導入したところで、英語を聞き取る能力が伸びているわけではなく、語彙・文法知識の伸長も停滞していることが指摘されている（成田2013、染谷2010 etc.）。また、日本語の使用を制限された学生は一種の知的空白状態に置かれ、状況限定的な会話など低いレベルでの言語処理しかできなくなっている。
上記の問題を解決する手法のひとつとして、大学の教養英語科目にて翻訳を導入し、学生のメタ言語能力、つまり、言語および言語使用について客観的に振り返り、分析する力）を開発させることとした。外国語学習において、母語が決定的に重要な役割を果たすことは、第二言語習得やバイリンガル教育研究などでは明白となっている。なぜなら、母語でできないことは外国語でもできず、反対に母語を鍛えることで結果的に外国語の習得を促進することができるからである（Cummins 1991 など）。さらに、人間の思考や行動は言語によって規制・形成されている。そのため、外国語としての英語の運用力を各人が必要な範囲で鍛えあげるには、母語としての日本語を駆使できるようにし、そのベースとなる両言語にまたがる共通基底言語能力を鍛えあげなくてはならない。翻訳とは言語的に埋め込まれた意味に加え、しばしばこれを超えた言語以外の意味も必要に応じた回復を迫られる深い処理を経て意味論的・語用論的等価性を実現する作業である。
そこで、2015年度から試行的に始まった英語カリキュラム改革の一環として、2015年度に入学した１年生376名（過年度生を含む）を対象とした共通教育科目の基礎英語Ｉ（前期/春学期開講科目）で翻訳を導入した。後述するように事前・事後アンケートを実施し、併せてポートフォリオを実施したクラスと、実施しないクラスを分け、自己調整学習能力の伸長度合いを測った。その後、PAC分析手法を用いたインタビューを2名に対して行い、半構造化分析を実施した。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要	まず、アンケート調査での授業前後における「英語学習に対するイメージの変化」の項目では、英語・日本語に対する意識変化をアンケートで聴いたところ「高校とは違う」・「新鮮」や、「英語だけでなく日本語の辞書」・「引く」が頻出し、当該表現の結びつきが強かったことから、言葉を客観視する刺激を与えることはできたといえよう。また、「訳に対するイメージの変化」の項目に対しては、「意訳」・「文脈」が頻出し結びつきも強かったことから、いわゆる文法訳読から文脈を参照した語用論的な等価を目指した言葉遣いを心がけるようになりつつあることもわかった。一方、その言葉遣いの適切さに関しては「訳」・「難しい」が頻出し、結びつきも強かったことから、言語の運用を自省させる契機になったと言えよう。 また、「英語の学習素材に求めるもの」を聞いたところ、「映画」・「音楽の歌詞」・「絵本」・「小説」などいわゆるポップカルチャーの素材を求めていることもわかった。かつて英語学科や英文科での翻訳の授業にて行ったアンケートにおいて同項目の調査したところ、ほぼ同じ答えが出てきた。この結果が意味するのは、英語を専門であろうがなかろうが、学習内容の功利性や実用性を求めて英語を勉強することのではなく、あくまでも学習内容の充実性を求める傾向が高いことである。グローバル化を推進する英語教育政策と、語学学習の功利性や実用性を求めない学生の意識のギャップをどのように埋める必要があるのか、今後の大きな検討課題であることも分かった。 次に、ポートフォリオを実施したクラスと、実施していないクラスでの、授業後のアンケートを比較してみたところ、「英語学習に対するイメージの変化」・「訳に対するイメージの変化」とも大差はなかった。この理由として考えられるひとつには、大学受験を終え、入学した直後に実施している半期科目であったことから、大学受験に向けて自己調整しながら学習を続けた習慣が残っていることが挙げられる。最後に、PAC分析手法を使ったインタビューを、本学の１年生２名を対象に調査を行った。刺激文として「英語の授業の課題として翻訳をするときどのようなイメージを抱きますか」を与え、自由連想をしてもらい、その類似度評定や類似度距離行列によるクラスター分析、参加者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告などを通じて、より詳細に個人レベルでの態度やイメージを聞いた。今回のインタビューは参加人数が少ないため、結果を一般化させることはできないものの、インタビューに参加した両者から得られた傾向を紹介する。まず、翻訳の作業を通して、文脈によって意味を使い分けることを改めて理解したと両者とも答えていた。両者とも、大学の個別試験において英語が課されていないために、英語への苦手意識が強いうえ、英語学習を「単語の暗記」と個人の中で位置付けて学習してきていたとのことである。さらに、英語は「楽しく単位が取れたらいい」と答えており、両者とも英語学習を継続する意思が低いこともわかった。 この結果、本学の教養英語科目で印象的に語られてきた問題点がデータとして改めて浮き彫りになった。また翻訳が言語運用の点では一定の効果を表すことも明らかとなった。

成果資料目録	第５回日本メディア英語学会発表用PPTファイル